

2014年度 さわやか杯 12ブロック決勝リーグレポート

2年連続で天候不順のため延期となった「さわやか杯決勝リーグ」が、快晴のもと9月14日(日)に日野市立平山小学校のグラウンドで行われた。今年度の4チームは八王子市からOKサッカークラブ、シルクロードサッカークラブ、日野市から多摩平 Jr サッカークラブ、日野八小フットボールクラブであった。この内、OKは3年連続の決勝リーグ進出であった。中央大会を目指して6試合が行われたが、すべての試合が1点差の接戦という激しい戦いが繰り広げられた。その中から八王子市内のチーム同士の試合をレポートする。

$$\text{シルクロードSC} \quad 2 \left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ \\ 1-1 \end{array} \right\} 1 \text{ OK SC}$$

両チームとも3-3-1又は3-1-3のフォーメーションであったが、OKはスタート時に右サイドMFであった体格の良い35番が前線に残ることが多く、2トップ気味と捉えることもできた。

開始早々の1分、シルクは中盤でボールを奪ったトップ下8番が左サイドを駆け上がり、中央にグラウンダーのクロスをあげた。それを押し上げてきた長身のセンターDF6番がスルーをし、やはり長身の右サイドDF10番が、落ちていてトラップした後にロングシュートを放った。このシュートは惜しくもゴールの枠をかすめて外れてしまったが、会場がどよめく強烈なシュートであった。6分、OKも中盤の右サイドから35番がゴールを向き、強烈なミドルシュートを放ったが、シルクGKの正面であった。7分には、シルクのトップ11番が右サイドに流れ、右サイドDF10番からスペースへ流し込むパスが出された。11番がそれを受けた後にゴールを向き、シュートを放ったが、ゴール右に外れた。シルクはトップ下8番が中盤でよくボールに絡んで、左右のサイドMFにボールをさばき、さらにDFラインも押し上げてくるので、展開力のあるサッカーを繰り広げていた。

10分、中央でボールをカットしたシルクの10番が、ドリブルで進みOKのDFをつり出した後に右サイドMFの17番につないだ。17番はフリーに近い状態でゴールに迫りシュートを放った。これは枠を捉えたシュートであったが、OKのGKが反応良く、右腕1本で弾いた。シルク右サイドの17番と10番は運動性が高く、この後も度々チャンスを作った。そしてついに12分、中盤でのボールの奪い合いに勝ったシルクが、左サイドを駆け上がったトップ下8番に丁寧に流し、ドリブルでゴールに迫った8番がシュートを放った。このシュートは一旦OKのGKに跳ね返されたが、8番がさらに詰め寄りゴールに押し込んで先制点を奪った。

一方のOKは13分、前線の35番がボールに絡み、中盤でのボールの奪い合いでシルクのパスをカットしたセンターDF23番が、ゴールを向いてミドルシュートを放ったが、ゴ

ールの枠を捉えることができなかった。また 17 分には、右CKでライナー性のキックに走り込んだ右サイドDF 2 番が頭で合わせたが惜しくも右に外れてしまった。このプレーはシルクのDFやGKが反応しきれておらず、前半の内に追いついていれば、勝負もわからなかったので非常に惜しいプレーであった。

シルクは右サイドの 10 番 17 番が目立っていたが、18 分には 17 番が右サイドを押し込んだ後に、突破できないとみるや中央側のサポートに入っていたトップ下 8 番に戻し、8 番が左サイドから押し上げてきた左サイドDF 15 番につなぎ、ミドルシュートまで持ち込んだ。この 8 番は視野が広く、何度のサイドチェンジを行っておりゲームメーカーとして大きく成長していくことが期待できる選手であった。また 15 番は、OKの 35 番と対する場面が多かったが、身長差がかなりあるにもかかわらず 35 番に粘り強く対応し、決定的なチャンスを作らせなかった。今後もこの気持ちを忘れずに戦い続けて欲しい。前半はこのまま 1 - 0 で終了した。

ハーフタイムでは、両チームとも選手をベンチに座らせ、コーチが立って作戦盤を使いながら話をしてきた。昨年度のレポートでも取り上げたが、ハーフタイムでの“プレイヤーズファースト（選手を第一に）”の姿勢は素晴らしいものであった。八王子の多くのチームでもこの姿勢を見習って欲しい。

後半はシルクが、前半ベンチから大きな声を出していた小柄な 16 番をトップに入れ、OKは体格の良い 31 番を前線に投入した。1 分、シルクはトップから左サイドMFに移った 11 番が、左サイドで突破を試みるが、崩しきれないと判断すると後方から押し上げてきた 15 番に落とし、15 番がゴール前にクロスを上げた。前半 18 分のプレーと同様なプレーで、ボールを大切にするシルクのチームコンセプトを感じさせた。5 分、中盤でのボールの奪い合いで勝ったシルクが、トップ 16 番の前方のスペースに丁寧にグラウンダーのボールを流し込んだ。そこに回り込みながら走り込んだ 16 番が、スピードに乗ったまま右足を振り抜き、逆サイドネットに低いシュートを突き刺した。このプレーの中で 16 番は、トップスピードでボールを追いながらチラッと相手GKの位置を覗いていた。走りながらシュートを放つというキックの技術だけでなく、シュートの前にゴールやGKの位置を“観る”という個人戦術の面でも素晴らしいプレーであった。16 番はまだ 5 年生で、体格的にも小柄な選手ではあるが、技術・戦術の面ではジュニア年代で身につけるべき基本を習得しており、将来性を感じる選手であった。

0 - 2 となったが、OKはあきらめない。8 分 35 番が右サイドでドリブル突破を試みるが、シルクの左サイドDF 15 番がここでも粘り強く対応し、クロスを上げさせずOKのCKとなった。11 分には、OKのセンターDF 23 番が中盤まで押し上げ、飛び込んできたシルク 10 番をかわし、トップ下の 33 番につないだ。33 番はゴールを向き、狙いすましてミドルシュートを放ったが惜しくも左に外れた。さらに 14 分には、OKの 31 番が中盤でボ

ールを奪い、右サイドでの突破を試みるが、強引にあげようとしたクロスボールはゴールラインを割ってしまった。

15分にシルクは左サイドMFの11番を下げ、体格の良い7番を投入した。残り5分を切り、このままシルクが逃げ切るかと思われた時間帯で試合が動いた。16分、OKの左サイドMFの25番が中盤でシルクのアプローチをかわし、押し上げてきた右サイドDFの2番に丁寧な落とし。このボールに走りこんだ2番が、ハーフウェイライン付近からロングシュートを放った。このボールがグリーンと伸びて、シルクGKの頭上をかすめてネットに突き刺さった。多くの観客の度肝を抜くすばらしいシュートであった。この2番は、前半のCKでも惜しいヘディングシュートを放つなど、攻撃力のあるDFで、たびたび攻撃に参加してくる23番とともに、将来性を感じさせる選手であった。このシュートでOKが勢いつくかと思われたが、17分にはOKのGKのパントボールが大き過ぎ、バウンドした後にシルクのGKにキャッチされるプレーが出てしまう等、OKに焦りが見られた。アディショナルタイムに入り、OKにシルク陣地でのFKのチャンスが訪れた。これをOKの23番が直接狙ったが、残念ながらゴールの枠を捉えることができず、試合が終了した。

両チームともゴールに向かう意識が高く、さすがにここまで勝ち上がってきたチームだと思わせたが、ボールを丁寧につなぎ、身体能力に頼ることなく、ボールを左右に展開してサイドDFが攻撃の起点となるシルクの方が、日本が目指すべきサッカーにより近いスタイルであったと思う。多くのチームに参考にして欲しい。

今回の4チームはそれぞれに特徴を持ったサッカーを展開していた。中央大会へ進出した多摩平 Jr、日野八小、シルクロードの3チームには各チームの特徴をさらに伸ばし、東京都の上位に進出してくれることを期待している。

【技術委員会からのコメント】(主に指導者に向けて…)

(1) 決定力のアップについて

「決定力のアップ」は、全てのチームが目指すべき課題であるが、この試合の3点はどれもすばらしい点であった。レポートでも述べたように、シルクの1点目はシュートが枠を捉えていた上に、打った後にしっかりとゴールに詰めていた。また2点目はシュートを打つ前にゴールを観た上で、流れているボールを走りながら蹴ってサイドネットにシュートを決めた。技術と戦術の基本がしっかりとしたプレーであった。昨年度のレポートでも取り上げたが、各種のシュート練習の際に、“ボール→ゴール(又はキーパー)→ボール”の順に観ることを、各チームの指導者は低学年のうちから繰り返し指導し、習慣付けさせて欲しい。

またOKの得点は、中盤であっても常にゴールを意識しながらプレーをしていたからこそ決まったシュートであった。日頃から両チームの指導者が、基本をしっかりと押さえた指導をしていることがうかがえた。

(2) ベンチからの試合中の指導について

この試合の後半の10分過ぎから、シルクベンチからは「繋ごう！繋ごう！」「ボールを動かして！動かして！」という呼びかけがなされていた。16分に1点を奪われ、1点差に迫られた後も「丁寧に最後まで繋ぐんだよ」という声が出されていた。これは具体的なプレーの指示ではなく、ボールを丁寧に扱おうとするチームコンセプトを再確認するもので、子ども達の判断を奪うものではない。この日のように中央大会への出場権のかかる試合では、ベンチや保護者席から具体的にプレーを指示し、子ども達の判断を奪うような声が出されやすい。例えば、「シュート（を打て）！」「右へ出せ！」「外へ蹴り出せ！」「相手のコーナー方向へ蹴っておけ！」等々の声がそれに当たる。勝つために大人（コーチや保護者）が熱くなりすぎ、このようなサイドコーチが続くと、個々の選手の判断力を伸ばすチャンスを奪ってしまうことになる。子ども達が将来クリエイティブ（創造性豊か）な選手に育つためには、大人はぐっと我慢して、子ども達の判断に委ねなくてはならない。そして課題があれば、試合後や次回の練習で状況を再現し、子ども達に課題を理解させた上で、その課題を改善する練習を組み立てていくのである。この繰り返しでユース年代までに大きく成長する選手を育成することができる。直接選手を指導するコーチは、大きな視点から子ども達を見て、目先の勝利にこだわりすぎてはならない。ジュニアのサッカーもスポーツなので、勝利を目指すことは当然なのだが、子ども達をコーチの言うとおりに動くロボットにしてはならない。（昨年度のレポートでは、日野市の杉野の指導について触れている。そちらも是非、参考にしていただきたい。）

(3) 選手に起用方法について

この試合で後半18分に、シルクの右サイドMFの17番がアウトして9番が入った。シルクはこの試合まで2敗しており、確実に勝ちたい試合であったが、スタートメンバーからハーフタイムで1人、後半に2人を交代させ、11人の子ども達に決勝リーグの舞台を経験させていた。17番の足が止まってきたという判断だったかもしれないが、短い時間でも、本番の舞台を踏ませることは子ども達の成長に大きく寄与する。ジュニアの指導者には、成長に差のある子ども達を大きな視点から眺め、一人でも多くの子ども達に公式戦のピッチに立つ経験を積ませてほしい。

指導者の皆さんには、ジュニア年代での指導の目標が「個の育成」であることを忘れずに、日々の練習や試合に臨んでいただきたい。「チームの勝利」を優先させすぎて、ジュニア年代の内に身に付けておくべき“身のこなし”や“両足でのボールコントロール技術”“攻守の個人戦術の理解”等がおろそかになってしまっただけでは、ジュニア年代ではチームが勝っても、子ども達個人はトップレベルに羽ばたいていくことができなくなる。子ども達が素晴らしい選手に成長するための土台作りをしているのだということを強く意識して、子ど

も達と接していただきたい。

技術委員会では10月18日(土)の午前中に、FC東京の普及部からS級コーチを招いて「指導者実技講習会」を富士森高校で開催する。多くの指導者の参加をお待ちしている。(詳細は、八王子協会HPの「最新情報」の9月4日を参照してください。)

【追伸】 この試合の終了直後に、両チームの選手がちょっとした言葉のやり取りから興奮してしまい、一方の選手が泣き出すという場面があった。主審がすぐに両者の間に入り、感情的になった選手を抱きかかえて落ち着かせ、試合を終了させた。的確な判断で、大きな問題とならない内に事態を落ち着かせていた。この日は12ブロックの審判団の皆さんが、各試合の終了後、輪になってその試合のジャッジについて協議し、お互いの審判技術を磨いておられた。技術委員会からも心より感謝したい。保護者、指導者、選手の皆さんも、審判の皆さんに対するリスペクトの気持ちを忘れずに大会に臨んでいただきたい。